

大下宇陀児・作 金魚は死んでいた より抜粋

「オイ、どうしたんだ。ランチユウがどうかしたのかい。死んでいたランチユウだよ」

警部の方もびつくりした顔になつて聞きかえしたが、平松刑事は、

「え、そうですよ。死んでました。しかし、死ぬ前には、生きていたんです」

そういつて何かの考えを、頭の中でまとめようとする眼つきになつている。

「ばかだな。死ぬ前に、生きていたのはあたりまえだろう」

「ええ……そうですね。それはたしかに、あたりまえですが……その生きていた時には、元気にひらひら遊いでいたといいましたから……」

「ちよッ！ なにいつてるんだ。ものが金魚だろう。生きていたら、ひらひら遊ぶのだつてあたりまえだぞ。それともランチユウつてやつは、游がずに、しやつちよこ立ちでもしてい

るのかな」

「あッ、そうか、それも……そうでした。ランチユウは頭が重いせいか、遊びながらでも、しやつちよご立ちになることが多いんですよ。——ええと、しかし、へんですねえ」

「どうも困った男だな。いつたい何がどうしたというんだね」

「そうでした。すみません。わけをハッキリと話さなくちやいけなかつたんです。実は、この事件の発見者は、島本守という若いお医者さんでしたね」

「そうだよ。そのとおりだよ」

「ところが、その島本が、私に、金魚はひらひらしていて美しかったといったんですよ。——いや、そんなふうにいつたのじゃ、わかりませんね。事件現場での話です。私は、金魚のことばかり気にしていました。それから島本に、生きていた時の金魚はどんなだかつて聞いたんです。島本は、ぼたんの鉢を老人のところへ持つてきて、庭で老人と立話をしたという

のですから、その時に、金魚を見たはずだと思つたからです。果して島本は、とくに注意はしなかつたけれど、金魚を見たつていいました。そして、ひらひらして美しかった、と
いつたんです」

「わかつたよ。わかつたが、それがどうしたんだね」

「島本の話では、ぼたんの鉢を持つてきたのが、事件発見のあの日、つまり五月六日くらいと、一昨日だといつたんじやないでしょうか。その時以来、老人には会わなかつたということもいつたはずですよ。ところが金魚があの上にいけた鉢の中へ入れられたのは五月五日、お節句の朝だということがわかつたんでしょう。六日からいつて一昨日は、つまり、五月四日にあたりますね。その時には、鉢の中に、金魚がいなかつたのじやないでしょうか。いない金魚を、島本は、なぜ見たんですか。いや、たしかに、見たはずはないんです。それを、私に、ひらひらしていたなんていつて……」

まわりくどい話しぶりだったが、はじめて井口警部にも、このことの重大な意味がわかってきた。

島本医師は、嘘をいつている。

2017年6月25日作成

青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。